

その昔、我々は残忍な子供だった。残忍な……というのは……餓鬼、という蔑称があるように、押しなべて、世の中の大人が子供だったときの、そういう残忍さである。目白とは、私がそのようなコッパ鬼だったときからの知り合いだった。小学生のとき、私たちは、野良猫を捕まえては公園の茂みに拉致し、性器を弄ったり首を落としたり生き埋めにしたりして、遊んでいた……。目白が家の蔵から持ってきた小刀は最高のオモチャだった。お互いの舌や脛でも切り落としてみようと思わなかったのが今では不思議だ。

ところで我々はその時分から芝居に魅入られていた。目白の家は古く大きな屋敷で、幾つもの物置があった。その中に忍び込んで、新しいオモチャを見つけるのが常であった。

「これは、たぶん、芝居に使うお面だよ」

怒った面、笑った面、泣く面……。その三つが埃を被って、我々の目前に猛然と現れた。目白がひとつ取って、自分の顔を隠す。私もそれに倣う。

「ハハハ、可笑しいな、……きみ、いつも仏頂面なのに、そのお面をしていると笑って見える……」

「それを言うなら、お前だって、間抜けなヘラヘラした顔が怒って見える」

それから二人で、芝居というのは、という議題で論議したのであった。お芝居というものは、自分にお面で隠して、笑ったり怒ったりしてみるものなのだ……と、小学生なりに大きな口調で演説をしたものだ。置かれた木箱へ片足を掛けて、あるいは実演してみながら、狭い物置の中で論理核武装をして戦争した。我々が戦争をするとき、たいていは何も残らない。

ある日は、公園のベンチへ乗り上がって、武将になったツモりで、雄弁に空想の軍隊を指揮した。ある日は、ヨソの子供を便所へ閉じ込めて、借金取りの真似事をした。廃劇場へ忍び込んで、その汚い舞台を少しばかり拝借したこともある。

……目白の妹が少し大きくなると、その遊びへ招いた。私には兄弟はない。しかし、彼女のことは本当の妹のように思っていた。いや、本当の妹のように思っていた……というのでは語弊があるのかも知れない。本当の妹のように可愛がっていた……というのが、正しいような気がしている。彼女は、私の小指をシッカリと握って、商店街の散歩をよくしていたもので、仲が良いのね……と行き交う人々に囁かれたものだ。

……時が流れて、高校へ上がった。その頃になっても、我々は、芝居遊びをやめられない少年だった。まるで幼い子供のようにだった。何にそんなに魅入られていたのか、それは未だに答えのない永遠の問いであるが、あらゆる脚本のあらゆる場面を再現しながら、戦争をしていた。

そんな、何も変わらない日に、目白の妹は土砂崩れで死んだ。何日も掘って漸く死体を見つけたが、あのときのことは忘れられない。私は長い間目白と共に居て、飄々としたとらえどころのない男だと思っていたが、死体に縋りつく彼の姿というものは、ほかに表現のしようのないほど、狂人であった。ひどく取り乱して……。私は近付くことすら出来ず、離れたところで茫然とするだけだった。それほど、恐怖を感じた。人の死……にではなく、半狂乱になった彼が非常に怖かった……。まるで何かに取り憑かれたかのような……私が今まで

見てきた目白の顔ですら、あれは芝居用の面だったのではないだろうか、立ち竦むばかりで……。

次にケロリとした顔を私に見せた彼というものは、どうも同じ人間とは思われず、暫く恐怖していた。野良猫を弄り殺し、感情のままに親を殴り、弱い者を吊し上げ笑っていた私が、初めて恐れという感情を抱いて、こんなものと戦争をしていたのか……と……私は無残な敗戦国になった気分で、強がることしか出来なかった。私を真っ直ぐ見据えて、ユックリと口角を上げる目白は、近世に描かれたような化け物に感じた。蜜柑を剥いて口に運んでやることすら、内心では怯えていたのだ。

「西井戸君、……古い本を見つけたよ、戯曲が載ってるよ」

「ふうん……どれ、見せてみろ」

「作者の名前がね……書いてないんだ、いつ頃のだろうね……」

劇団を旗揚げしてからも、社会に属していないこと以外は、今までと何ら変わらない日々を送っていた。これほど遊び尽しても遊び足りないほど、あの蔵は混沌であった。あれから……あの面を見つけた日から、随分と時が流れたのに、私は餓鬼の頃からひとつも変わっておらず、そのことに歎びも絶望もせず、そして論理戦争をしていた。結局のところ、私は核戦争をしていないと、喉を掻き筆りたくなるのである。掻き筆って、言葉をその穴から放り出したくなるのである。……

——ある脚本で、私はある女と舞台に上がった。我々はそこで夫婦となり、彼女は赤ん坊を抱いていた。……この女は表の貼り紙を見てやってきた、何物にも動じない澄ました不思議な女だ。稽古している時間より鏡を見ている時間が多いのに、もの覚えがよく台詞を忘れたことがなかった。場末でコーヒー店をやっているという話を聞いたことがある。向かいのバーで、マスターがオカマの愛人を作っているだとか、毎日店の裏で排泄をしていくお婆さんだとか、路地裏で子供が脱ぎ合っていただとか、そういう話を、紅を塗り塗り喋っていた。

私はこのコガネという女に非常に惹かれている。これまでおぞましく嫌悪していた性愛というものすら感じる。それほど良い女の武器があるわけでもないが、足はスラッとしていて美しい。人間を殺せそうな流し目は客も非常に悦ぶ。私に被虐趣味はない筈だが……

……どうなのだろう……私は、舞台上で殺されることに、ひどく興奮してはいなかったらうか……

妙なことを考えるのはよそう。

コガネは舞台を降りると赤ん坊には興味がない。机にその人形をポイと放り出し、鏡を見ながら化粧する。コガネが、その髪一本一本、睫毛一本一本ですら、私のものになれば、どれほどの欲が満たされるだろう……と、ある種思春期じみた思想で……。

……この頃、目白は蔵に閉じ籠り切りだ。フトした瞬間に、その横顔は、狂人であったときの彼を連想させるような気がする。少女の写真の前に座り、線香を突き立てるとき、私はいつも……敗戦国の気持ちだ。……